宮野悦義名誉教授年譜

一九三一（昭和六）年　五月九日、（旧）朝鮮京城府本町二丁目九〇番地で、洋服商宮野博、ゆわの五男として出生。韓国人の乳母（安某、通称オモニ）に可愛がられる。乳母は日本語が達者で、バイリンガルに育つ機会を失する。

一九三七（昭和一二）年　夏、母とともに（旧）満州大連市を訪れ、失踪した父を探す。大連のアカシア並木、当時の胃腸薬「ワイフ」の看板、特急列車アジア号の記憶のみが鮮烈に残る。

一九三八（昭和一三）年　四月、京城府公立南山小学校入学、学帽が特大サイズだったため、兄たちに「仮分数」というあだ名を貰う。秋ごろ、父を偲ぶ盗作まがいの詩をつくり、担任の女教師を泣かせる。

一九三九（昭和一四）年　この頃、都市対抗野球での「オール京城」チームの活躍に刺激されて野球ファンとなり、近くの本屋で雑誌『野球界』のグラビアを立ち見する。この雑誌のスタルヒン投手の写真に感激し、早くも巨人ファンの下地ができあがる。

一九四〇（昭和一五）年　四月、三年進級とともに男子のみのクラスとなり、以後男女共学とは一切無縁となる。この頃、京城巡業中の大相撲で双葉山を見、野球についで大相撲のファンとなり、二人の兄とともに紙相撲を作って熱中する。

一九四一（昭和一六）年　この年、尋常小学校あらため国民学校となり、われら少国民は極寒の時期にも裸足で朝礼を行うこととなる。体操の時間に、振り上げた腕が美人女教師の胸にあたり、教師と共に赤面する。

一九四二（昭和一七）年　この頃、自宅にあった電蓄でクラシック小品のレコードを聞く。兄の影響でギターやハモニカ、オルガンなどの楽器に興味を抱くが、いずれも長続きせず。

一九四三（昭和一八）年　落語全集に熱中する。秋、小学校の学芸会で劇「乃木大将」の主役に抜擢されるが、舞台練習で足がすくみ、ついに農夫役に格下げとなる。

一九四四（昭和一九）年　四月、京城公立中学校入学、柔・剣道でしごかれる。また旧三八式の小銃を担ぐ教練にあごを出し、しばしば配属将校に怒鳴られる。英語の授業に興味を抱く。（「敵性語」として排斥する風潮強まるなかで、きわめて充実した基礎教育が行われたことには、ただ感謝あるのみ）

一九四五（昭和二〇）年　四月から勤労動員（疎開家屋取り壊し作業等）のため授業は行われず。八月一五日、京城郊外の軍飛行場での動員中に終戦の詔勅、このラジオ放送は雑音のため聞き取れず、校長の訓話も要領を得なかったため、実際に終戦を知ったのは翌日となる。ほどなく日刊紙『京城日報』から「ひらがな」が消えて「漢字とハングル」の紙面となり、大きなショックを受ける。母は内地引き上げを拒否し、これに同意して可能な限り京城に居座ることを決意する。九月、中学は閉校となり、初めての浪人生活を体験する。以後、それまで禁止されていた映画館に足しげく通うようになる。（映画館では駆逐された日本映画に代わってもっぱら外国もの、とくにフランス映画が上映された。おそらくは戦時中映画館の倉庫で眠っていたものであろう。字幕はまだ「ハングル」になっていなかった。ここで『望郷』、『われらの仲間』など、ジャン・ギャバン主演の映画多数を観る。またグレタ・ガルボ主演映画『椿姫』のヌード・シーンに夜眠れず）一〇月以降、韓国人の元店員とともに、戦時中統制下にあった隠匿洋服生地の販売に従事する。その後、大挙引き揚げる日本人家族に家財処分を委託され、これらを店頭にならべてアメリカ兵相手の土産物商売をする。一年間習い覚えたキングズ・イングリッシュでアメリカ兵に立ち向かうが通ぜず、もっぱら手話を活用する。

一九四六（昭和二一）年　一月、前記商売に妨害が多くなり、ついに一家引き揚げを決意する。京城から母、姉、弟の四人（兄はすべて旧軍人で早々に強制送還）、それぞれ重量級のリュックを背負って引き揚げ者専用の貨車に乗り込む。トイレ用の穴以外は通常の貨物列車と同様で、時折投げつけられる石の音を聞きながら無言で釜山へ向かう。釜山埠頭の長い通路でリュックの重みに尻餅をつき立ち上がれぬところを、アメリカ兵に助け起こされ、情けない気持ちになる。三日目に博多港に到着、初めて見る内地の激しい空襲の爪痕に幻滅する。ほどなく福岡県八幡市（現北九州市八幡区）の親戚の家にころがり込むが、しばらく虚脱状態が続く。四月、母の希望を受け入れて県立小倉中学校に編入、第二学年に編入したため、その後の学制改革に巻き込まれて、後に旧制高校受験資格を失う。夏、南方戦線にいた次兄が麻雀パイをかかえて復員、折しも食糧難時代で、空腹感をまぎらすために家族で麻雀を覚え、これに励む。

一九四七（昭和二二）年　家族ぐるみで統制違反の闇商売に従事し、家業再開の資金稼ぎに努力する。この年夏、小倉中学が甲子園の夏の全国大会で優勝、幼年期の野球熱が甦る。

一九四八（昭和二三）年　四月、八幡市中央町で家業（ただし履物商に転向）再開、これを手伝うことを条件に進学を許され、県立小倉高校（新制）に編入学する。中学二年を反復したため成績優秀で、以後もっぱら家業の手伝いに専念する。

一九四九（昭和二四）年　この頃、機械好きの友人に勧められて真空管ラジオの製作に熱中する。また怪しげなレコード・プレーヤーを製作し、暇をみてはSPレコードでクラシックの小品を楽しむ。

一九五〇（昭和二五）年　家業隆盛のため大学受験を許され、家業手伝いの合間に受験勉強に励むが、軽度の色弱のため理科系受験を断念、担任教師に薦められて一橋受験を決める。

一九五一（昭和二六）年　三月、小倉高等学校卒業。四月、一橋大学経済学部入学、現小平図書館付近にあった南寮の住人となる。一ヵ月三千円の耐乏生活にもめげずよく遊ぶ。寮の先輩にドイツ歌曲を教わり、怪しげな音程で歌ううちにドイツ語への関心高まる。

一九五二（昭和二七）年　五月、斎藤講師（のちに相沢講師）の独語テキストであったハイネの『告白』に触発されて、このユダヤ詩人の生涯に関心を抱く。九月、寮を出て三鷹市西久保に下宿、ドイツ文学作品を読みふける。紀伊国屋書店で東独アウフバウ社版のハイネ全集六巻を購入し、将来の方向をむりやり決定する。

一九五三（昭和二八）年　四月、一橋大学社会学部に転部、大畑末吉教授宅を訪問して強引にゼミナール指導を願い出る。以後研究室ないし目白の大畑教授宅で一対一の贅沢なゼミナールが続き、ルカーチのハイネ論文、ドイツ文学史などを読む。九月、財政逼迫して再び寮生活に戻り、中和寮（現院生寮）、続いて如水寮（現磯研付近）の住人となる。

一九五五（昭和三〇）年　三月、一橋大学社会学部卒業。四月、社会学研究科修士課程に進学。同時に青梅市第二中学校で英語の非常勤講師として勤務し、学費・生活費を稼ぐ。

一九五七（昭和三二）年　四月、同博士課程に進学。五月、ドイツ文学会会員となる。大畑教授の勧めもあって以後ドイツ古典文学、とくにG・ヘルダー研究に専念する。一一月、藤沢久子と結婚、妻の生活力に期待するが見事に裏切られてアルバイトの時間増となる。

一九五九（昭和三四）年　『ヘルダーの民謡（フォルクスリート）研究』を学会誌（日本独文学会『ドイツ文学』二三号）に発表する。

一九六〇（昭和三五）年　大畑教授の紹介でヨハンナ・シュピリの作品『ぼくたちの仲間』の下訳の仕事をする。

一九六一（昭和三六）年　同じく大畑教授の紹介でJ・ゴットヘルフの『黒い蜘蛛』の児童文学向け抄訳を手がける。立川の私立昭和第一工業高校の英語担当非常勤講師を委嘱される。

一九六二（昭和三七）年　寮時代の先輩、桶谷秀昭氏（文芸評論家、当時東洋大学英文科助教授）から新設の東洋大学工学部に紹介され、同大学工学部専任講師に採用される。四月から川越市鶴ヶ島の校舎でドイツ語および文学の講義を担当する。

一九六三（昭和三八）年　三月、一橋大学大学院博士課程単位取得論文を提出し、在学期限ぎりぎりで同課程を退学する。東洋大学の同僚とともに、ドイツ語初級読本ならびに中級教科書編集の仕事に携わるが、出来映えはいまひとつの感あり。

一九六四（昭和三九）年　四月、一橋大学非常勤講師を委嘱され、小平校舎でドイツ語を担当する。かっての恩師多数に囲まれ、小平教官室で落ちつかないひとときを過ごす。一〇月、大畑教授の指導のもと、アンデルセン『絵のない絵本』の訳注を手がけ、郁文堂独和対訳注叢書（共著）として刊行する。

一九六五（昭和四〇）年　四月、東洋大学で助教授に昇任する。ヘルダー関連論文『Palingenesie考』を一橋論叢（五四巻四号）に発表する。

一九六六（昭和四一）年　四月、中央大学法学部非常勤講師

を委嘱される。この年、府中市日鋼町の住宅公団分譲住宅に当選し、資金繰りに四苦八苦する。

一九六七（昭和四二）年　三月、東洋大学を退職。四月、一橋大学法学部専任講師に採用される。（俸給大幅にダウンし、間違いではないかとあつかましく経理課に問い合わせる。相次いで二度の昇給を受けるが追いつかず、前年の住宅購入を後悔する）『レッシングにおける寛容の理念』を一橋論叢（五七巻三号）に、„Heines Bekehrung" を Hitotsubashi Journal of Arts & Sciences (Vol. 8, No1) に発表する。同年秋ドイツ文学会会員の一部による「ワイマル友の会」が結成され、大畑教授とともに会員となる。またこの年、一橋大学・津田塾大学マンドリン・クラブが創設され、その顧問を引き受ける。

一九六八（昭和四三）年　この頃からふたたびハイネ研究を再開し、とくにユダヤ人問題との関連に注目するようになる。ハイネの未完の小説断片を考察した、『バッヘラハのユダヤ司教—その成立と背景』を一橋論叢（五九巻一号）に、また、『ハイネとサンシモニスム』を『言語文化』（五号）に発表する。一一月、一橋大学法学部助教授に昇任する。

一九六九（昭和四四）年　この年前期学務委員会委員となる。折しも学園紛争全盛期で、一年間に六〇回余の委員会が開催される。（これは同委員会の今後とも永久に破られることのない記録であろう。そのため一年間でお役御免となった）『ハインリヒ・ハイネ』を一橋論叢（六一巻四号）に発表する。このころ「ワイマル友の会」がDDRとの学術交流のために企画した独文による業績レジュメ集 Information der Fachkommission für Bibliographie der „Freunde von Weimar" — Wichtige germanistische Abhandlungen in Japan の編集作業を担当する。

一九七〇（昭和四五）年　紛争の後遺症で、国立の研究室に八名ものゼミ学生を迎えて当惑、ゲーテの『ファウスト第一部』を読むこととする。『ハイネにおける「流謫の神々」主題の考察』を一橋論叢（六四巻六号）に発表する。

一九七二（昭和四六）年　同僚の加藤二郎氏から、歴史学者ゴーロ・マンの „Geschichte und Geschichten" の共訳依頼を受け、同著のうち『反ユダヤ主義について』ほか一〇篇の論文を翻訳する。（『歴史論』上下二巻、加藤二郎氏と共訳、法政大学出版局、一九七二、一九七三年刊行）

一九七二（昭和四七）年　この頃、紛争後の虚脱状態を克服するという口実で同僚と教職員硬式テニス部を創設、小平のコートでテニスに熱中する。書評 L. Marcuse: Börne—Aus der Frühzeit der deutschen Demokratie を一橋論叢（六七巻二号）に発表する。

一九七三（昭和四八）年　社会学部良知力氏の依頼で、ドイツ初期社会主義資料の翻訳および校閲に協力、W・ヴァイトリング『人類、その現状と未来』を翻訳する（良知力編『資料・ドイツ初期社会主義』、平凡社、一七七五年刊行）。一二月、法学部教授に昇任する。

一九七四（昭和四九）年　五月、ドイツ文学会で山下肇氏主宰のハイネ・シンポジウムが開催され、「ハイネとサンシモニズム」について口頭報告を行う。（報告者多数で討論の時間が

不足し安堵する）研究ノート『ハイネとワーグナー』を『言語文化』（一〇号）に発表する。（ハイネの視点からの一面的なワーグナー像で、その後大いに反省、改めてワーグナーの著作および音楽作品に取り組むきっかけとなった）マルクス入門書、杉原四郎・佐藤金三郎編『資本論物語』の企画に加わり、『マルクスと詩人たち―ハイネとの交友』ほか四章を分担執筆する（有斐閣、一九七五年刊行）。

一九七五（昭和五〇）年　良知力氏からドイツ四八年革命（フォアメルツ）関係の原資料コピー多数を紹介され、ハイネと同時代の詩人F・フライリヒラート、G・ヴェールト、ジャーナリストのE・ドロンケなどの資料研究に没頭する。書評、『鈴木和子著「ハイネ―比較文学的研究」』を『言語文化』（一二号）に発表する。

一九七六（昭和五一）年　『「死者より生者へ」―フライリヒラートの裁判事件』を一橋論叢（七三巻三号）に発表する。この年ハイネ研究者鈴木和子氏から「ハイネ研究図書」刊行について相談があり、協力を約束、『試論　ハイネの洗礼について』を寄稿する（ハイネ研究図書刊行会編『ハイネ研究』第一巻、東洋館出版社所収）。

一九七七（昭和五二）年　ハイネ研究の大先輩井上正蔵氏の都立大学退官記念論文集に参加し、フォアメルツ期の代表的な政治詩集に関する論文、『詩集「アルバム」について―真正社会主義者の歌』を寄稿する（井上正蔵記念論集『ハイネとその時代』朝日出版社所収）。

一九七八（昭和五三）年　『ドロンケの社会小説』を一橋論叢（七九巻二号）に発表。四月、恩師大畑末吉氏死去、大きなショックを受ける。七月、「ワイマル友の会」の推薦で、ワイマルで開催される夏季研修セミナーに参加、はじめてドイツを訪れる。（小平で顧問をしていたクラスの学生たちが、中年教師のドイツ訪問を寄せ書きで激励してくれる。イエナ大学主宰の同セミナーは社会主義国らしい生真面目な企画で、朝八時から夜一〇時まで研修が行われ、そのあまりにも充実した内容に多少辟易する。ワイマルの歴史的ホテル「エレファント」に約三週間あまり無料で滞在、DDRに少なからぬ恩義を感ずる。セミナー終了後、研修という名目で東西両ドイツ各地を回る）

一九七九（昭和五四）年　ワイマル友の会の企画、H・J・ゲールツのドイツ文学史翻訳作業に参加、「青年ドイツ派」に関する部分を翻訳する（H・J・ゲールツ『ドイツ文学の歴史』、朝日出版社）。大学基準教会で単位互換問題の委員を委嘱される。

一九八〇（昭和五五）年　良知力氏の依頼を受けて大月書店刊『マルクス・エンゲルス全集』収録予定のエンゲルスの書簡の翻訳に協力する。またマルクスの初期小論『プロイセン―軍事国家』ほか四点を翻訳する（大月書店刊『マルクス・エンゲルス全集補巻三』所収）。書評 F. J. Raddatz: Heine. Ein Deutsches Märchen を『言語文化』（一七号）に発表する。

一九八一（昭和五六）年　稲野強氏とともにP・プシビルスキ著『裁かれざるナチス』を翻訳する（大月書店から刊行）。また『プラーテン論争をめぐって』を一橋論叢（八六巻一号）に発表する。

一九八二（昭和五七）年　三月、資料調査のためＤＤＲを中心に二度目のドイツ研修旅行を行う。この機にハンガリーおよびチェコを訪れ、ワイマルのセミナーで知り合った友人たちと旧交をあたためる。学園史刊行委員会からの依頼で『ドイツ語百年史素描』を執筆、一橋百年史事業の一環である『一橋大学学問史』に収録される。

一九八三（昭和五八）年　『連邦決議とハイネ』を発表する（ハイネ研究図書刊行会編『ハイネ研究』第五巻、東洋館出版社所収）。学会編集委員会委員となり学会誌『ドイツ文学』の編集に携わる。

一九八四（昭和五九）年　書評『藤平慮郎著「ドイツ古典文学試論」』を社会思想史学会年報（『社会思想史研究』八）に発表。八月、小平分校主事に就任する（一九八六年七月まで）。

一九八五（昭和六〇）年　『Trotz Alledem―フライリヒラート序説』を一橋論叢（九三巻一号）に発表する。

一九八七（昭和六二）年　一橋大学学制史資料編纂の仕事に加わり、同資料第一〇巻、戦後編（小平関係）の編集作業を担当、同解題を執筆する。

一九八八（昭和六三）年　書評 H. Kircher: Dorfgeschichten aus dem Vormärz を『言語文化』（二五号）に発表。四月、語学研究室室長に選出される（一九九〇年三月まで）。七月、如水会後援会の援助を得て約三ヵ月間ドイツに滞在、デュッセルドルフ・ハイネ研究所およびマールバハのシラー研究所を中心に研修。秋、国立の公開講座に参加し、ハイネについて話をする。

一九八九（平成一）年　秋、フランクフルト在住の大学院生から送られたニュース・ビデオで、ＤＤＲの慌ただしい変革の動きを追う。一一月、ベルリンの壁崩壊のニュースに感激すると同時に、ＤＤＲの今後を案ずる。一二月、早稲田大学で行われた「ワイマル友の会」研究例会で「ドロンケの作品をめぐって」と題する報告を行う。

一九九〇（平成二）年　一九八八年から開始した近畿大学収蔵の「キストナー・コレクション」調査にもとづき、フォアメルツ関係の稀覯書のリストを作成。六月、解題『キストナー・コレクション第三回配本―ドイツ・オーストリアの三月前期の文学』（丸善）を執筆。

一九九一（平成三）年　神戸大学木庭宏氏企画の『ハイネ散文作品集』刊行に協力することとなり、ハイネ晩年の回想録『メモワール』の翻訳を開始する（『ハイネ散文作品集』第三巻所収、松籟社、一九九二年刊行）。夏、再びドイツ、デュッセルドルフのハイネ研究所を訪れて研修、またライプツィヒ、ワイマルなど旧東独の状況を視察する。日本女子大学人間社会学部非常勤講師を委嘱される。

一九九二（平成四）年　書評 W. Kasper: Keinem Vaterland geboren. Ludwig Börne. Eine Biographie を『言語文化』（二九号）に発表する。

一九九三（平成五）年　書評 D. Hertz: Die jüdischen Salons im alten Berlin を『言語文化』（三〇号）に発表する。

一九九四（平成六）年　ハイネの本邦未紹介の散文作品『シェイクスピア劇の女たち』の翻訳を開始する（『ハイネ散文作

品集』第五巻所収、松籟社、一九九五年刊行）。

一九九五（平成七）三月、一橋大学定年退職、名誉教授の称号を与えられる。